

教科教育キャリアアップフィールド（図工・美術）

図工科・美術科担当教諭の力量を培う研修

－10年経験者研修の内容－

美術教育専修 辻 泰 秀

1. はじめに

筆者は教員養成学部の附属学校での教職経験をへて、現在岐阜大学教育学部で図工・美術科教育に関する講義を担当している。10年経験者研修（12年目研修）の教員を毎年3～4名受け入れている。大学における当該研修講座は、7月下旬から8月下旬までの1カ月のうち5日間を充てているが、どうしても限られた時間での研修になるので、随時研修の機会をもつことが望まれる。図工・美術科の教科書をもとにした研究、ビデオによる授業分析、実践を通じた指導内容の改善などを行っている。本稿では、その研修の内容について述べる。

2. 図工・美術科の教科書をもとにした研究

(1) 図工・美術科の教科書の考察

図工科や美術科の教育内容にあたる造形表現の範囲は広い。たとえば日本美術と西洋美術があるし、時代によっても多様な展開を見せている。本来作家の個性が造形表現に反映されていることを考えれば、作家や作品ごとに異なった学習内容が含まれているはずである。たとえば中学校の教科書では、40頁程の中に古今東西の美術が集約されている。俵屋宗達や尾形光琳を初めとした日本美術の頁があれば、現代のアニメーションやCGなどの映像メディア表現の頁もあるといった具合である。そして絵画・彫刻・デザイン・工芸といった造形の各分野に関して、全般的に学習できるように配慮されている。抽象表現と具象表現、自己表現と適応表現といった相違のある造形表現についても、3年間で一通り経験する題材配列になっている。

図工・美術科を専門とする教師であっても、これだけ幅広い美術の内容について熟知することは容易ではない。多種多様な造形表現の図版が記載されており、それぞれの作品について十分に理解し説明することができない状況がある。個性にかかわるだけに、一つだけでなく様々な表現があることを示そうというねらいが存在している。

小学校図工科だけでも学年ごとに6冊あり、手元には3社計18冊の教科書がある。平成に入ってから図工科の教科書だけでも積み上げるほどの分量になる。図工・美術科の場合、改訂のたびに題材や作品例がほとんど差し替えになっている。さらに、中学校美術科、高等学校美術科、高等学校工芸科といった校種の違うものを順に並べて、その学習内容を調べていくことで、結構な教材研究になる。

研修では、まず教科書を見渡ししながら、それぞれの学年でどのような内容・作品が取り上げら

れているのかを知る。そして、自分なりの研究の視点を設定して分析するようにする。たとえば、次のような視点が想定できる。

- ・編集の方針（どのような教育観や美術観にもとづいているのか）
- ・学習指導要領との関連（どのように題材として具体化しているのか）
- ・題材の内容（何を、どのように学習するのか）
- ・題材の系統性（学年や校種の連携はどのようになっているのか）
- ・魅力的な題材（ぜひ指導してみたい題材はどれか）
- ・取り上げられている作家、作品、様式
- ・取り上げられている材料、用具、技法
- ・他教科の教科書の記述との比較
- ・題材ごとの説明や発問のし方
- ・教科書の活用方法（授業展開の中で教科書をどのように位置づけていくのか）
- ・改善の方法（自分が新たな教科書を選択したりつくるとしたら）
- ・指導資料の作成（教科書の内容を補足するために必要なものは何か）

学校に勤務していると担当している学年や校種の教科書だけを知っていて、特に機会がなければ他の教科書を見ないで済ましてしまう傾向がある。学年にしたがって頁をめくっていくと、子どもたちの発達の状況に応じた系統性が読み取れるはずである。たとえば、一つの表現分野について、どんな材料が使われているのか・どのような題材配列になっているのか・個性的な表現を引き出すためにいかなる工夫が行われているのかといったように、課題意識をもった見方をしてみるとよい。

題材配列において一貫性が必ずしもあるとはいえず、小学校図工科と中学校美術科の教育観や内容の連携が十分でないとか、同じ作品が小学校と高等学校の双方で記載されているということもある。比較することによって系統性や改善点が見えてくる。そのような教科書の比較研究をする際に、小学校図工科・中学校美術科・高等学校美術科の教科書を横断的に調べてみる、各社の教科書を概観する、アメリカなど海外の教科書も参照するといった教材研究の方法がある。

また、教科書では紙面の関係から完成作品の図版を記載している場合が多く、完成にいたるまでの表現の過程は推察するしかない。どんな手順や方法で表現していったのか・材料や用具はどんなものを使用したのか・作者はどんな点を工夫や苦心したのかといったことを把握して、子どもたちに示す準備をしておく必要がある。

(2) 教科書の題材についての試作や資料づくり

教科書の題材や作品について自分で制作したりリサーチをすることが、教材研究につながる。図工・美術科の場合には、実際に描いたり、つくったりして初めてそのおもしろさや指導上の留意点が理解できる。このような試作やリサーチを伴う教材研究をする際には、下記のような三つの段取りが考えられる。

- ①教科書の作品図版や説明をヒントにしながら、どんな題材や作品にするのかを決定する。魅力的な内容であるとか、ぜひ指導してみたいものを選択するとよい。同様の題材や作品例が他の学年や他社の教科書に記載されていることが多いので調べておく。
- ②材料や用具を準備する。教材を扱っているメーカーやホームセンターなどで間に合わせる方法があるが、せっかくの機会なので、身近な環境から材料をさがす活動を取り入れる。たとえば、地域の山や川にある木の枝・流木・竹・葉っぱ・つる・石・砂を活用する、大工さんや製材業の方に木片を依頼する、段ボールやペットボトルなどをリサイクルするといった方法がある。
- ③いろいろと試行錯誤しながら制作をする。教科書には完成した作品が示してあるが、具体的な材料や表現方法などについての図や説明の多くは省略されている。そこで、材料・制作過程・工夫した点・指導上の留意点などを写真や文章で記録し、制作の様子をよくわかるようにしてみる。もちろん、教科書の題材や作品は一つのヒントなので、自己流に発展させてもかまわない。

夏期休暇の研修をかねて美術館で実際の作品を鑑賞することも貴重な経験である。自分の目で見て実際の作品の魅力を感じれば、子どもたちにその鑑賞体験を語る事が可能になる。たとえば、現代を代表する美術としてフランク・ステラの作品図版が教科書に記載されていることが多いが、彼の作品の魅力は実際に見てみないと十分にわからない。作品の大きさ・重量感・色彩や筆遣いといったものは、壁一面の大きさの作品を見るのと、教科書の小さな図版として見るのとでは、かなり状況が異なる。とくに、1980年代以降のレリーフの作品は、その凹凸感や空間性は図版では理解できない。名古屋市美術館・愛知県美術館・富山県立近代美術館などの近隣の美術館に常設展示されているし、千葉県の川村記念美術館にあるフランク・ステラの作品のコレクションは、世界的にも有名である。

本来、様々な題材について試作をしたりして教材研究をするというのは、12年目研修に限らず日常の教科指導に伴って行うべきことである。しかしながら、多忙さの中で教材研究に時間と労力を費やしていない傾向がある。改めて造形表現の魅力を経験し、その資料を教師間で交流したり子どもたちにも紹介できるようにしたい。

3. ビデオによる授業分析

(1) ビデオによる記録の方法

通常は教材の準備や授業を進めることで精一杯で、実践をビデオカメラで記録したり、授業を振り返る際に活用するところまで手が回らないことが多い。ビデオによる記録を通して改めて自分の姿を見たり声を聞くことに、気恥ずかしさと抵抗感があるかもしれない。けれども、自分の実践を見つめ直すことは、12年程の教職経験を経たときにとくに大切になるものと思われる。

教職経験を積んでくると教材づくりや授業展開に慣れてきて自分なりのスタイルが身についてくる。自信をもって指導にあたることができるという点では、経験はプラスになる。しかし、そうした慣れや自分のスタイルの形成は、同時にマンネリに陥ったり新鮮な感動を希薄にさせることになりがちである。そのため、自分の授業を多様な目で見つめて、継続的に授業改善をすること

とが求められる。

授業を記録するには、ビデオの他にもカルテのように書き留めておく方法、写真で記録する方法などがある。ただし、授業の場面をより良い条件で再現できるという点で、ビデオカメラでの記録は利便性がある。ビデオカメラならばボタンを押すだけでよいので、授業の始まる前にカメラを設定してスイッチを入れておけば一応記録ができる。書き留めるの場合には継続して記入することになるので一斉指導をしながらの記録は無理である。写真の場合は静止画像になるため指導プロセスや教師と子どものコミュニケーションは記録しにくい。子どもたちの発言・表情・動作の移り変わりや教師の助言の内容などは、音声を伴う動画ならば記録できる。

学習指導案や研究紀要の文章は、貴重な実践資料の一つである。ただし文章による情報よりは、映像や音声による情報の方がリアルでわかりやすい。「子どもたちは興味をもって活動していた～」という文章を読むよりも、実際の活動場面の映像記録を見たり聞いたりした方が伝わりやすいのである。

授業は毎日のように行われているし、12年目研修の年代には自分の教職生活が永遠に続く印象を受けるので、さして記録の重要性を感じることはない。ただし、学年が進みクラスがかわったり、教職員の転勤があったり、校舎の改築があったりすると2度と同じ環境での教育実践が行われないことに気づく。一生懸命に教科指導や学級経営に取り組んでいる年代であるからこそ、なおさらビデオ記録は貴重なものになる。

(2) ビデオによる授業記録の活用

ビデオカメラによる授業記録をとったとしても、落ち着いて見直す機会はなかなかもてない。12年目研修をきっかけとして活用するように心掛ける。自分で授業を進めていると、どのような動作・表情・言葉がけをしているのかがよくわからない。機会を見つけて授業の様子を記録し、子どもたちへの対応や働きかけ方について振り返るようする。また、カメラを通して子どもたちを異なる角度から眺めてみると、そのときには気づかなかった子どもの反応や活動の様子がわかることがある。一人ひとりの子どもに応じた指導するにはどのようにしたらよいのかという視点から、授業の内容や指導方法を検討する。

12年目研修の年代は、実践を積み重ねてきてその内容を示すことを期待されている。40代～50代の先生方からは、研究会の柱としてこれからの教科研究や運営を担う人材になって欲しいという期待をもたれている。また、20代の若手の先生方からは、実践についての身近な相談相手になって欲しい、授業実践の参考例を示して欲しいといった期待をもたれている。したがって、いつでも実践内容を発表できるように資料を作成しておく必要がある。

授業の内容や展開を検討する際に、ビデオをもとにしていろいろな方から意見を聞くと考え方が深まる。学校であるならば教科や年代層に広がりがあるので意見交換が可能である。子どもたちの普段の様子や性格を知っている教師が多いことから具体的な助言を得る場合がある。12年目研修のように図工・美術科の教諭がいるときには、教科内容や材料・用具に関する情報交流へと発展する。また、指導主事・他校の熟練教師・大学の教員にビデオを見ていただくと、経験や専門的な立場からの助言になる。さらに、新任や若手の教員に示したり説明を加えることで、自己の実践をまとめたり紹介する機会になる。ビデオに加えて学習指導案・子どもたちの作品やレポー

トもあわせて準備するとよい。

このようなビデオによる実践資料は、長時間にわたるものを丸ごと提示することは少ない。端的に実践内容を伝えるにはどのようにしたらよいのかと言う観点から映像資料の精選を行うことになる。授業のねらいや子どもたちの活動の様子が最もよく示されている映像を選択することになるので、授業分析のよい機会になるはずである。その編集の過程で授業内容を見直したり実践のポイントを再確認する。授業者自身として、まずビデオの記録を再度見直し自分の実践の流れをつかむことが必要である。

パワーポイントのためにデジタル映像からパソコンに静止画を取り込む場合には、音声が多くなるので適切なキャプションや授業者による解説をつける。このような資料づくりを研修の機会を利用して行っておくと、主体的に研究発表ができるし、資料の検索や編集の手間を省略することもできる。

ただし、このような実践記録は、教師が成果や成功例を示すためにあるのではなく、授業改善を目的としている。授業で苦心していること・困難点なども含めて記録することによって、より適切な助言や意見交流が可能になり、授業改善につながるが多い。

ビデオによる授業記録は、授業の主役とでもいうべき子どもたちにフィードバックする役割ももっている。子どもたちは自分たちの活動の写真やビデオを見るのが好きである。制作過程や取り組みの様子を記録しておく、活動の振り返りがしやすく鑑賞や自己評価の際に活用できる。とくに造形遊び、アースワーク、パフォーマンスのように作品として残りにくいものについては、映像による記録が重要になる。

4. 実践を通じた指導内容の改善

16年度の12年目研修では、題材の発展性について検討してみた。一人の教諭が子どもの興味を引き出すことができたと手ごたえを感じた題材は、その教諭が担任している特定の学級で成果を得ることができたものである。実践研究の立場からいえば、その題材について検証し、より多くの場で成果の上がる方法をさぐるものが求められる。比較検証の視点として、次のような項目が上げられる。

- ・他のクラスや学年ではどうか。共通点と相違点を明らかにする。
- ・異なる学校ではどうか。その学校ならではの教育環境があるのか。
- ・題材の示し方を変えることによって子どもたちの反応や活動も異なるのか。適切な参考資料の示し方や、材料や用具の準備を検証する。
- ・同じ題材でも、指導者の違いによって実践の結果が異なってくるのであろうか。支援や助言の方法の違いによって、子どもたちの造形活動も異なってくるのか。

本年度は、12年目研修に来られた図工科の教諭が「ようこそ光の世界へーキラキラ・ワールドー」について、対象である子どもや教育環境を変えて実践することになった。光を扱う造形活動は、近年学習指導要領に位置づけられ、しだいに多くなってきている。この図工科の教諭は、ブラックライトと蛍光色を使った実践と、液晶プロジェクターを活用した万華鏡の実践を取り上げた。

今回は試みとして勤務校では得ることができない教育環境を設けることにした。ブラックライトと蛍光色を使った題材は、教科書等でも取り扱われている。けれども、授業に必要な数のブラックライトを用意する、太陽光が入らないように教室を暗くする、さまざまな色の蛍光カラーを子どもたちが選択できるように準備するといったことがあり、実際にはほとんど行われていないようである。

また、液晶プロジェクターで万華鏡の色や形を拡大する活動も、スクリーンや暗幕の関係で学校では使える場所が限られてくる。そのため美濃市文化会館のホールとステージを使って実践をすることにした。美濃市文化会館では、映画や舞台芸術を鑑賞するために季節や時間帯にかかわらず、広い空間を暗くしたり照明を工夫することができるようになっている。液晶プロジェクターで、ステージの上の映画用のスクリーンに映像を拡大することもできる。

夏期休暇中になるので、美濃市文化会館を通して参加者を募り40名ほどの子どもたちが参加した。当日は岐阜大学教育学部の学生15人余りも支援スタッフとして加わって実践をした。子どもたちが普段の図工の授業でブラックライトや蛍光色を使うことはほとんどないし、液晶プロジェクターを活用する万華鏡も初めての経験になる。そのため開始したときには、活動の見込みがもてずに戸惑っていた子どもがいた。けれども、蛍光色で描いたものがブラックライトで光ることや、どのようにすれば万華鏡として美しく見せることができるのかを理解するにつれて、子どもたちの造形意欲は高まっていった。小学校の1～6年生の子どもが参加していたことや、初対面の子どもたちを対象としているため、指導にあたった図工科の教員も、いつもとは勝手が異なった。しかし、題材の提示のし方や助言の内容などについて見直す機会になった。この教諭の勤務校での実践内容や研修での実践の詳細については、改めて報告する予定である。

5. まとめ

教職生活の中で10年経験者研修（12年目研修）の年代は、教科指導や学級経営において創意工夫したことを蓄積していくことが可能であり、教師としてとくに伸びる時期である。新任当時は現在の指導に追われて実践を振り返るだけのゆとりを生み出すことが困難である。また、20年目を越えると学年主任・生徒指導主事・教務主任をはじめとした学校全体の経営にかかわる仕事が増え、教科指導や学級経営に集中できなくなってくる。もちろん、学校の仕事の全てが大切であることは言うまでもないが、教科指導や学級経営は、多くの子どもたちと日々接するだけに教師としての力量が問われる場であるので、研修に励んでいただきたい。研修をすることは、もちろん時間や労力のいることである。それだけに、今後より充実した内容になるように支援し、共に学んでいくつもりである。